

榎忠作品における日常性と非日常性

An ordinary and an extraordinary of the Chu Enoki's works

1K06B513-0

松原勝彦

指導教員 主査 寒川恒夫 先生

副査 杉山千鶴先生

第1章 序論

1960年代に誕生し隆盛を迎え、現在ではその意味も広義になったパフォーマンスアート。身体を使ったパフォーマンスアート、ハプニング、ボディアートはそもそも、既成の芸術表現に対するカウンター的な意味を持っていた。つまりアートの中でも異端だったわけである。その中でもさらに特殊な位置にいる人物がいる。榎忠である。身体から廃材まで様々な形態で作品を作り、自宅、公園、高架下等あらゆる場所で展示してきた。アートという言葉をすり抜けるようにして変幻自在に自身のスタイルを変え、作品を生み出してきたのである。

日本赤軍の活動がまだ活発だった1977年、国境越えがまだ難しかったこの時代に「ハンガリー国にハンガリ（半刈り）で行く」という作品を発表し実際に体毛を半分全てそり落しハンガリーに行った。また廃材を集め全長13m総重25tの巨大彫刻を作ったかと思えば、マンションの分譲地に穴をひたすら掘り続けるといった作品もある。一見何の脈絡もないように思える彼の作品群であるが、共通点を見出すことが出来るのではないかな。それが本研究の出発点である。そして考察、検証の結果、以下のような結果に至った。つまり身体性あるいは場所性を使った日常と非日常との融合である。わかりやすく言えば一般的な人にとって敬遠しがちなアートを身近なものとして捉えているのだ。アートという非日常的な要素を日常から切り離すのではなく、むしろ日常と結びつけることあるいは日常の延長上というスタンスで作品に向き合っているのだ。2章では作家の生い立ちと時代背景に焦点をあて、どのようにして表現者としての考えを持つにいたったかを論じる。3章から作品における日常と非日常が結びつくために重要な働きをしている場所性と身体性について具体的な作品を挙げ考察していく。また関連する作家、作品と比較し榎の独自性を浮き彫りにする。

第2章 生い立ちと時代背景

1944年、香川県に生まれる。幼いころから漫画やイラスト

を描いていたという。16歳で就職のため神戸に移り現在に至る。10代後半の時にオートバイに熱中し人身事故を起こす。これがきっかけで絵を学び始める。21歳で二科会に出展。26歳で公募団体に疑問を持ち脱退。グループZEROを結成。この団体は集団でハプニングやパフォーマンスをすることが目的であり、行為として現在の榎の活動に通ずるものがある。その後JAPAN KOBE ZEROになり、32歳で脱退。ここから代表的な作品が生まれていく。榎が芸術を志し始めた1960年代の日本では反芸術運動が盛んになっていた。また世界的にもポップアート、コンセプチュアルアート、アクションペインティング、などそれまでの価値観を破壊するようなアートが誕生していた。ここでは読売アンデパンダンや榎自身が影響を受けたと語る作家や作品について考察し榎の考えを追っていくことにする。

第3章 作品についての考察・検証

具体的な作品をいくつか挙げ、榎作品に通ずる特徴を考察し、身体性と場所性が生み出す日常と非日常性の結びつきについて検証していく。また関連のあるアーティストや作品と比較することによって榎作品の特異性に迫る。

第4章 結論

様々な表現方法と素材で作品を作っている榎忠であるが、各作品を比較していくと見えてくるのが身体性と場所性である。そして身体性と場所性によって与えられるのは非日常が日常に溶け込む様である。普段何気なくある身体そのものであったり、身体に迫ってくるような作品が当たり前の風景の中に存在する。これにより日常と非日常との境界線が曖昧になる。その揺らぎこそが榎忠の特異性であり共通性である。

